

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	浦田 悠
論文題目	人生の意味に関する心理学的研究 —量的尺度と質的モデル構成—		
(論文内容の要旨)			
本論文では、量的手法による新たな尺度の作成と、質的手法によるモデル構成を中心に、人生の意味の概念についての理論的・実証的検討を行った。 論文は、4部9章で構成し、理論と実証的知見を概観した第1部、実証的検討を行った第2部、新たなモデル構成と方法論を提示した第3部、まとめと今後の課題を示した第4部から成っている。 第1部では、主として分析哲学の領域で見られる人生の意味論と心理学的研究の歴史と知見を概観した。 人生の意味論については、「究極的・宇宙的・客観的・超自然主義的な意味」を含む立場を「人生の意味 (meaning of life)」、「地上的・世俗的・主観的・自然主義的な意味」を重視する立場を「生活の意味 (meaning in life)」としてまとめ、さらには、これまでの人生の意味論ではあまり取り上げられてこなかった「超意味」「前意味」「脱意味」なども人生の意味の概念として含めることとした。 また、心理学的な研究については、従来の理論モデルと実証的研究の知見を「意味の構成要素」「意味の源・幅」「意味の深さ」「ナラティブとしての人生の意味」「システムとしての人生の意味」の5つの視点から捉え直した。 第2部では、（1）従来用いられてきた尺度の問題点を補完する新たな心理尺度を構成すること（調査1、調査2）、（2）人生の意味への問い、すなわち意味追求の側面の諸相を検討すること（調査3～調査5）、（3）人生の意味の源、意味の幅、意味の深さについて、先行研究の方法論を用いた本邦での調査を行った上で、意味の源についての新たな尺度を構成すること（調査6、調査7）の3つの目的を掲げ、順番に検討した。 まず、調査1と調査2において、実存的空虚についての新たな尺度（EVS）を作成し、このEVSと意味の幅（意味の源の多様さ）、対人信頼感・情動的共感性・死に対する態度との関連を検討した。その結果、各要因との関連から、実存的空虚が精神的健康に概ねネガティブに関連すること、意味の幅が広いことがポジティブな人生観や感情と関連することが示唆された。 調査3～調査5では、意味への問いに焦点を当てて、問いの重要性・きっかけ・時期・			

(続紙 2)

自我体験についての質問項目を用いた質問紙調査、および自我体験と意味への問いについてのインタビュー調査を実施した。

その結果、質問紙調査では、意味への問いを重要視する程度と意味を問う頻度の性差（いずれも男性＞女性）を見出すとともに、過去に自我体験があると認められる者は、問いへの関心が高いことも示された。

自我体験に関するインタビュー調査では、体験者と認められた研究参加者から、意味への問いと密接に関連すると思われる問いを見出した。さらに、意味への問いに関するインタビュー調査では、大学生・大学院生5名の語りの内容と特徴の差異から質的コード化を行い、生活の意味や人生の意味について、人生の意味論と共通するパターンを抽出した。

調査6と調査7では、意味の源について調査した。従来の方法論を用いた調査の結果、欧米の知見と類似の意味の源を見出しつつも、意味の源の内容による人生観の差異を示唆する知見も得られた。

さらに、この結果と先行知見を踏まえつつ、意味の源の追求と実現の2側面を測定する新たな尺度（IMI）を構成し、青年期から成人後期までを対象に調査を実施した結果、それぞれの側面が世代によって異なる様相を呈することを見出した。

第3部では、ここまでの理論的・実証的検討を踏まえ、哲学的な人生の意味論と、先行研究や本研究で得られた心理学的な知見を媒介し、包括的にまとめるモデルを構成した。

理論的背景を踏まえた「基本枠組」と、心理学の先行研究を踏まえた「基本要素」を媒介・統合する「基本構図」を構成し、生活の意味を人生の意味が包む入れ子状の枠組を提示し、先行知見をそこに位置づけるとともに、概念的・方法論的な仮説を生成した。さらにこのモデルを応用し、意味のつながりを評価するアプローチを取り入れた新たな方法を提案し、人生の意味の構造を分析する概念枠組と方法論の可能性を示した。

以上、本論文では、人生の意味に関する量的尺度の作成と質的モデルの構成を大きな目的とし、一連の研究により、これまでの心理学的研究における概念的・方法論的問題の一端を解決し、今後の当該研究領域の発展に寄与する量的・質的双方からのアプローチを提示した。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、次の4つの観点において、優れた研究として高く評価された。

1) 「人生の意味」という難しい問題に心理学的にアプローチしたこと。

「人生の意味」ということばは日常的に多く用いられ、哲学的にも古今東西の学者によって論じられてきた。誰にとっても重要な問題であることは自覚されている。しかし、心理学的にアプローチするには、あまりに漠然とした問いであり、なおかつ細分化すると本質が失われてしまう難しい問題である。しかも、実証的に研究するのは、なおさら困難である。この難しいテーマに正面から果敢に挑戦したことは高く評価できる。

2) 「人生の意味」の概念的整理を丁寧に行い、新たな理論枠組みを提示したこと。

従来の「人生の意味」に関する、哲学的小および心理学的研究に関する歴大な研究を幅広くレビューし、それらの概念的な整理を行った。また、理論的、方法的問題を明確にした。

分析哲学における人生の意味論については、「究極的・宇宙的・客観的・超自然主義的な意味」を含む立場を「人生の意味 (meaning of life)」、「地上的・世俗的主観的・自然主義的な意味」を重視する立場を「生活の意味 (meaning in life)」としてまとめ、さらには、これまでの人生の意味論ではあまり取り上げられてこなかった「超意味」「前意味」「脱意味」なども人生の意味の概念とした。

心理学的な研究については、従来の理論モデルと実証的研究の知見を「意味の構成要素」「意味の源・幅」「意味の深さ」「ナラティブとしての人生の意味」「システムとしての人生の意味」の5つの視点から捉え直した。

3) 「人生の意味」に関する新たな尺度構成と数量的調査を行ったこと。

第一に、従来心理学調査で用いられてきた尺度の問題点を補完する新たな「心理尺度」を構成した。

第二に、「人生の意味への問い」調査を行い、意味をどのように問うかという追求のしかたの諸相を検討した。意味への問いの重要性・きっかけ・時期・自我体験についての質問項目を用いた質問紙調査、および自我体験と意味への問いについてのインタビュー調査を実施した。その結果、質問紙調査では、意味への問いを重要視する程度と意味を問う頻度の性差 (いずれも男性>女性) を見出した。

(続紙 4)

また、過去に自我体験がある者は、問いへの関心が高いことがわかった。

第三に、「人生の意味の源」「人生の意味の幅」「人生の意味の深さ」について、質問紙調査を行った。青年期から成人後期までを対象に調査を実施した結果、それぞれの側面が世代によって異なる様相を呈することを見出した。

4) 先行研究や本研究で得られた心理学的な知見を包括的にまとめるモデルを構成し、それを用いて質的に分析する方法を具体的に示したこと。

理論的背景を踏まえた「基本枠組」と、心理学の先行研究を踏まえた「基本要素」を統合する「基本構図」モデルを構成した。

また、生活の意味を人生の意味が包む入れ子状の枠組を提示し、先行知見をそこに位置づけるとともに、概念的・方法論的な仮説を生成した。

さらにこれらのモデルを応用して、質的テキスト分析を試み、意味のつながりを評価するアプローチを取り入れた新たな方法を提案し、人生の意味の構造を分析する概念枠組と方法論の可能性を具体的に示した。

以上のように本論文は、人生の意味に関する量的尺度の作成と質的モデルの構成を大きな目的とし、これまでの心理学的研究における概念的・方法論的問題を解決するためのモデル構成と、量的・質的双方からのアプローチを具体的に提示したところに大きな意義がある。

試問では、いくつかの問題も指摘された。モデルの適用可能性とそれによって何が新たに見いだされるのか具体例のさらなる蓄積が必要なこと、人生の意味を問う実存的な深みやその欲求が立ち現れてくるダイナミックな生成プロセスが扱われていないこと、時間軸が考慮されておらず生涯発達の視点が欠けていることなどである。

しかし、これらの問題は、本研究の将来の展開に関わるものであり、本研究の価値を損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成23年2月10日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降